



大川周明

イスラームと天皇のはざままで

白杵 陽著

多面的な人物の「断層」を考察

大川周明しゅうめいは、一般に東京裁判で東条英機の頭をたたいた奇行で記憶されている。しかし中国研究者の竹内好は、日本のイスラーム研究の先達として彼を高く評価した。事実、その遺産を継承して戦後日本の井筒俊彦の仕事が生まれたのである。

こうした複雑な性格をもつ大川は、日本通史、アジア論、欧州植民地研究、イスラーム論など多面的な領域で業績をあげた。本書の著者は、これらの仕事の間に潜む矛盾や「断層」を手がかりに、アジア主義者にして国家改造運動の指導者の思想と人生を解析

した。

第一の断層は、宋学的世界観の性即理に「宗教と政治とに間一髪をいれぬ」イスラームの総合的な体系を重ねて見た点にある。第二は、イスラームの外面性と内面性をめぐる断層であった。第三の断層は、アジア的であるが東洋的ではないイスラームの特質にほかならない。そして第四の断層は、イスラームと天皇制の關係に潜んでいる。

著者によれば、大川の東京裁判での精神錯乱は、イデオロギー的な破綻はたんと同時に人格的な破綻として、裁判前後の「断絶」を象徴していたとい

うのだ。この結語は容易に想像できるが、卓抜なのは、大川がその精神的危機を、預言者ムハンマドへの関心を狂気のなかで再発見することで克服し、それによってイスラームの内面性を体現するスーフィー（神秘主義）的な世界を回復したと考える点である。

白日夢で度々ムハンマドと「会見」し、この「理想的人格」への傾倒を通して内面的生活に向かい、精神的自伝「安楽の門」にたどり着いたという指摘は、アラブ・イスラーム研究者でないとは出てこない。

著者は1956年、大分県生まれ。日本女子大学教授。

（青土社、2520円）



【評】山内 昌之（東大教授）